

父と母への恩返し～歌と調味料で幸せを創る

合同会社食王代表 声楽家 イタリア料理研究家 田中 利幸

初めに

私は埼玉県行田市生まれです。今（令和3年10月）から3年半前の平成30年の3月、満61歳の時、家内と二人で【合同会社食王】という【徳之島の食材を使用した調味料の①開発②製造③販売を兼ねた食品会社】を一から立ち上げました。目的は【食卓にたくさんの笑顔】の幸せ作りと【沢山の人に歌を聴いて頂き、歌による命の共鳴と共感】の機会作りです。そのために【人を活かし個性を引き出す】ように【食材を活かし、持味を引き出す】オンリーワンの新しい調味料が必要になりました。現在プロジェクトはどんどん推進中です。

60代から販路のあてもなく、食材探しから始めるという無謀とも見えるリスクな生き方をなぜ選んだか？なぜ食品会社の目的に歌が入るのか？その理由には【生んで育ててくれた両親への恩返し】が根底にあります。そのプロセスを今回頂いたスペースの中で謹んで皆様にお伝えさせていただきます。

神様からの手紙

以前、致知出版の藤尾編集長の講話を聴く機会があり、森信三先生の言葉で「人は生まれた時に天の神様から一通の手紙を貰って生まれて来る。その手紙には、その人が一生かけて果たすべき使命が書かれてある」という部分がありました。その時、私はその神様からの手紙を開いたことがあったろうか？あったとしたら何時開いたのだろうか？また、その手紙には何が書いてあったのだろうか？という思いに至りました。

幸い私は思い返すに「中学校卒業式の日朝の早朝に手紙を拾った」と自覚がありました。実は中学卒業式の日朝の早朝に私は誰もいない学校に着いていなければならない理由がありました。それは卒業までの3年間でおんぼろ校舎の廊下を3回踏み抜いてしまったことがあり、だれにも告げることなく有耶無耶にしていました。そのまま無かったことにして卒業もできましたが、自責の念が、

卒業式が近づくとつれ強くなりました。そこで決心して、踏み抜いた廊下にお詫びをしてから卒業することにしました。雀の鳴き声と共に学校に行き、既に用務員の先生が修理して頂いた廊下に直接手を当ててお詫びをしました。

その後、誰もいない教室に行き、汚れていた黒板を綺麗にして自分の席に着くと、不思議なほど心がすっきりしていました。天地人と言いますが誰も見ていなくとも、その有様を見ていた大切な【天】とその踏み抜いた場所である【地】と私自身の【人】にお詫びができ許されたのかもしれない。だからでしょうか3年間の様々な思い出が走馬灯のように巡ってきました。嬉しかった事柄、悔しかった事柄、全てが宝物のように感じられ、明日からクラスメートとは会えなくなる事や学校に来られなくなる事がとても寂しくもあり、逆に旅立ちの喜びもあり、不思議な感慨に陥りました。

その時です。3年間の感謝を誰もいないグラウンドに行って全身全霊で「ありがとう！」と叫びたくなりました。「きっと更に気分が良くなるぞ！」の思いもあり、すぐにグラウンドに行き、誰もいないのを確認した後「3年間ありがとう！」と叫びました。私は学校で1番声が良いと言われていたので、全身から声が出てとても気分が良くなると想像していましたが、真逆で喉が大変痛くなり、それまでの気持ちの良さが失せてしまいました。実はその時が今にして思えば、天の神様からの手紙を拾った瞬間でした。

イタリア留学と挫折

私は、音楽教育は全く受けていませんでしたが、紆余曲折があり音楽大学を声楽科で受けることになりました。1回目は見事？に落第しましたが、2回目は合格しました。途中、学内試験に合格してオペラ科も選択しました。授業の中で通常の人的人生ではあり得ないような状況やオペラのストーリーのキャラクターを歌声で表現することの楽しさと難しさに直面しました。

発声練習の良い声で歌っても、人生に1回有るか無いかの状況のリアルな声は、まるで出せませんでした。声として美しく歌っても、主人公の心持になれ

てない自分が居て、自分自身納得できませんでした。また、激情に任せて歌うと【中学卒業式の日朝グランドで叫んだ時】と同じように喉が痛く、しかも遠くに声が届きませんでした。いろいろ声の出し方を試行錯誤しましたが上手くいかずに、授業についていけなくなり、結局オペラ科をやめてしまいました。

卒業演奏会には選抜されて演奏を披露できましたが。【中学卒業式の日朝の全身全霊でのありがたい声】【オペラのキャラになり切った声】を体得したくてオペラ歌手の登竜門である二期会オペラスタジオを受験して合格。研究生になりました。そこで日本を代表する演出家や歌手の授業を受けるにつれ益々こだわり、声の出し方が一層判らなくなり、試験では落とされなかったのですが、自分の意志で留年して一学年下のクラスに編入して学び直しました。しかし、熱意とは裏腹で益々声の出し方の無間地獄に陥り、そのまま卒業すれば二期会の準会員（プロ）になれたのですが、大変迷った結果、失意の内に自ら学校を退席しました。

その頃です。偶然知り合いから【イタリアのオペラ全盛時代の有名な歌手ベニアミーノ・ジーリ】のレコードを借りました。自宅ですぐに再生しました。ジーリの歌うイタリア語は全く意味が分かりませんでした。しかし、主人公の気持ちが痛いほど伝わってきて、いつしか私は声を上げて鼻水をたらしながら泣きじゃくっていました。しばらく放心状態が続きました。私はなんでこんなに取り乱したのだろうか？そのうちしっかりと判りました。この声こそ私が求めていた【心と一致した全身全霊の生きた歌声】だったのです。

直情的な私はイタリアに行けばジーリの様な歌声が学べると感じ、全ての仕事を辞め、結婚も親がかり留学費用も親がかりで3年間がリミットの条件で、家内と一緒にイタリア留学に出して頂きました。

イタリアに着き、住居も決まりいよいよ受験です。しかし、志望の国立の音楽学校には年齢制限に引っ掛かり落とされました。また、その年の法律で学生ビザがないとイタリアに3か月以上留まれないと判り途方にくれましたが、大学の先輩の推挙と説得でミラノ公立音楽学校の学長は心を動かし、受験日は過

ぎていましたが、オペラ科に男声合格者が居なかったため、特別に受験のオーディションを受けさせて頂き、幸い合格しました。

人生は不思議なものです。その時のオーディションの先生が、私の留学期間中で知り得た限り、ただ一人【ジーリの様な全身全霊の心の声】が出せる先生でした。その先生が「利幸はいつの日か私のような声を出せる様になるでしょう」と言って頂いたこともあり、週に3回もその先生のレッスンを受けました。しかし、1回も望む声を出すことができず、瞬く間に3年が過ぎました。

一度日本に帰国して両親に「理想の声の先生に出会えて頑張っているのもう少し留学を続けさせて欲しい」と伝えたところ、父が「間もなく退職なので月の仕送り 23 万円は退職金から出すことになるが、お前に夢があるならばらくはいいだろう。それを理解して帰りなさい」と言って下さり再びイタリアに戻りました。しかし、残酷にも1回もその声は出せずに絶望の中で7年が過ぎました。このままでは、自殺してしまいそうな心持になり（今から思えば献身的に支えてくれた家内がいたお蔭でそうならず済みました。命の恩人です）先生にレッスンを辞めることを伝えました。その時先生から頂いた言葉は、人生の宝物です。「利幸！お前は最初のレッスンから真剣だった。7年間ずっと真剣さを貫いた。それはあなたより私がより強く感じ知っています。そんなあなたが私のもとを去るのを決めたのなら、それは前進です。進歩です。おめでとう！あなたはその真剣さをこれからも貫いてください」

ちょうどその頃、あるトリノの老夫婦に夕食に招かれました。その席で私は「ジーリの様な全身全霊の心の声を体得しようと、イタリアに来て素晴らしい先生と出会い頑張ったが、7年以上頑張ったが、まだ駄目なこと等」を語りました。その時、ご主人が「利幸はその声をいつかは出すことができるのかい？」と尋ねましたので、私は直ぐに「はい！」と答えました。そうしたら私の人生を救う言葉をかけてくださいました。

「利幸、イタリアの伝統の声を日本人であるあなたが人生をかけて追及してきてくれてありがとう。私は少し前から天の神様に『あなた達とこんな幸せな

時間を過ごせる機会を頂けたこと』に対してずっと感謝を伝えています。人はどんな苦しい時でも、前向きに考えることも絶望的に考えることもできます。もし、今呑んでいるワインがグラスに半分になっていて足りないと思ったら、残り半分を飲んでいる時から『足りない思い』でつまらなくなるでしょう！ハハ大丈夫ワインはたっぷりあるけどね。逆に『またとない素敵な時間を半分のワインのお蔭でほろ酔いになることができた。更に残りの半分で、より素敵な語らいに花が咲き嬉しい！』と考えることもできるよね。利幸が今日も明日も来年も望む声が出せないだろうと考え、苦しい毎日を過ごすのも自由なのだ。逆に、いつその声が出せるのか毎日期待に胸を膨らませてわくわく生きるのも自由なのさ。まずは、その求める声が出せる体に生んでくれたあなたの両親に感謝だ！利幸！」

私は心の中の雨雲が一瞬にして消え、太陽の輝きに代わるのを感じました。そして【有名な歌手になって日本に凱旋】などという浮ついた夢を捨て日本に帰る決心をしました。

父の事

日本に帰国して驚いたのは父が2回の脳梗塞によってすっかりやつれていたことでした。父はいつも手紙の中で【元気で居る事。庭の手入れの事。相撲の結果等】しか書きませんでした。自分の病気のことを伝えたら、私が夢半ばで帰ってきてしまう事を危惧して手紙には【健康だ】と、うそを書いていたのでした。その頃、父は寂しくなると私が送った写真や手紙を見ながら、一人で泣いていたそうです。

私はすぐに父に歌を聴いてもらいました。まだまだ未完の声でしたが、父は涙で床を濡らすほど泣いて「良くなった。良くなった」と言ってくれました。そんな父は間もなく心臓にペースメーカーを入れる手術を受け、親孝行をする間もなくその1年後に天国に逝ってしまいました。

亡くなる日、病院で父の容体があまり良くなかったので、私は仕事を休んで

父の側にいると伝えたところ、父は「男は仕事があるときは仕事に行きなさい。私の側に居なくてもいい」と言い、私を追い返しました。しかし、作事中に父は亡くなりました。父は無口でしたが気概のある誠実な人でした。

父の隠された夢

父には子供時代から夢がありました。それは大きな船で航海士として七つの海を渡り歩く人生でした。そのため商船大学に合格し、卒業してから商社に合格。機関士として商船に乗り込み海外に行く生活が始まりました。父は夢の第1歩を進み始めました。終戦後直ぐの事です。その頃、戦地から復員兵として帰って来られたにもかかわらず、病気で伏していた父の兄が亡くなったため、父の失意の両親は家を守るために商船会社に行き、退職願に印鑑を押して父を辞めさせてしまいました。

父は自分の夢を両親に潰されたのです。以来、父の夢は【もし自分の子供が夢を追うならば、それを叶えるために何でもしてあげる】に変わったそうです。この事は父の葬儀の後に母から聞かされました。母はずっと前から私にこのことを伝えたかったそうですが、父に止められていたそうです。その秘密を知った私は一晩中泣きました。生きている間に「ありがとう」を直接父に伝えたかった！

母の事と私の出生の秘密

母は高崎の食品問屋の長女で生まれました。気丈な性格であるためか中々結婚のご縁がありませんでしたが、地元に戻った父とお見合いで結ばれ、行田に嫁ぎました。常に優しく、願えば大体のことは叶えてくれる過保護ながら凜とした母でした。その過保護さには実は訳があったのです。

私の家内はイタリアから戻ってから体調が思わしくなく、ある日病院で精密検査を受けた結果、大きな子宮筋腫があることが判りました。おそらくイタリアで私が心労をかけ過ぎたのが原因であったろうと今は推測しています。不幸

なことに2回目の手術で子宮全摘になりました。

妻が失意の中で退院したときに、母は私の出生について話してくれました。実は私を妊娠する前に2回妊娠したことがあったそうです。それが2回とも流産になり「もう1回でも流産したら離婚して高崎に帰れ！」と姑に言われ、私を身ごもっている間中、針のムシロに寝る思いだったそうです。幸いなことに無事に私は生まれました。「あなた達の苦しみはどれ程のものか、私には痛いほど判ります。だから、私には何も気兼ねすることはないのです。夫婦の仲が良いのが一番です。それが大切なのだから、あなたたちは仲良くいきなさい。それが私にも一番嬉しいことですよ」と言ってくれました。その時から私のさやかな夢は【全身全霊の心の声の歌を1回でも母に聞いて頂く事】に代わりました。

しかし、本物の世界はそんなに甘いものではありません。その後、母にはたくさん歌を聞いてもらいましたが1回も納得できる歌を聴いてもらえないうちに、母も天国に逝ってしまいました。母の葬儀の翌日、母の友人がやってきて母のメッセージを私に伝えてくれました。その方がおっしゃるには「私の息子は大きな夢を追いかけて生きている。まだその夢は実現していないけれど、夢を追う子供の背中を見て応援できる幸せな親の人生を貰いました。良い友達に恵まれているし、息子はいつか必ず夢を叶えるでしょう」

親孝行とは

しばらく、両親が天国に行ったあと、両親に対して親孝行ができなかったことを強く後悔しましたが、母の友人の言葉やある方のアドバイスで分かったことがあります。

【親孝行とは両親が元気なうちに喜ぶことをするのも一つですが、子供が生まれた時に両親が最初に願ったことを、一生をかけて叶えるのが本当の親孝行です。つまり、健康に生きる事。よい人と巡り合う事。人様の迷惑にならないように生きる事。みんなが幸せになるように生きる事】

親孝行は一生かけて行うだけでなく、天の神様から頂いた手紙の中身の使命を果たすための原動力であることに気が付きました。

料理教室から生まれた調味料

イタリア留学時代から始めた料理教室ですが、トータル 26 年以上になるその教室の中で、病気でリタイアされた後、再び戻られた生徒様が数名いらっしゃいました。その生徒様とご家族様のため、全ての生徒様とご家族様のため、健康を食で支えたい願いから今回の調味料の原形が生まれました。

それはイタリアで学んだ【地域の食材を活かし製法や伝統を守りその結果地域と地域の人を守る】スローフードの教えに基づいています。その調味料は、食材そのものを美味しく生かす調味料でした。それに気が付いた大学の恩師のお嬢様が、還暦の私に「会社を立ち上げ多くの皆様にこの調味料を伝えなければなりません」と強く背中を押してくれました。

予感と会社立ち上げ

会社を立ち上げたら、その努力と苦労と出会いと喜びの中できっと【全身全霊の心の声で歌が歌えるようになる】予感をどこかで感じましたので、会社の目的は【感謝の調味料で食卓にたくさんの笑顔】の幸せ作り【丸ごと一つの歌を沢山の人の聴いて頂き、歌による命の共鳴と共感】の機会作りになりました。

これは親孝行そのものであり、無尽蔵の苦労はかけるものの、命の恩人である家内への恩返しであり、料理教室の生徒様への感謝の表明でもあります。

61 歳です。ぐずぐずしてはいられません。「すぐに会社立ち上げだ！」とばかり会社を登記。屋号は「人」を「良」くする願いを込めて【食】良いものを作るには志をもって当たり前前の事の努力を積み重ねて商品を作る「王道」の作り方から【王】の字を頂き【食王】に決定。差別化のための最高食材探しに出発進行。

徳之島との出会い

会社立ち上げ前から、大学の恩師のお嬢様が奄美大島の観光大使であったご縁で、奄美大島の方の協力で奄美大島や徳之島の食材で試作を始めていました。長寿と健康の島の奄美群島での食材探しの旅。美しい【徳之島】との出会いがすべてを変えました。2年間毎月徳之島に出向き、その結果、漸く最初の商品が完成したのが令和2年2月。すぐにコロナ渦中になり、たくさんの苦難が来ていますが【ありがとう】に変換する生き方にシフトしています。すべては経営者として学ぶために必要なこと。食卓に楽しい革命を起こす調味料で、食卓にたくさんの笑顔を創って参ります。

終わりに

両親の深い愛に包まれた人生で気が付いたことは【あつという間の人生で、悲しい事嬉しい事、全てに意味がある事】【天の神様から頂いた手紙の中の使命は、一生の親孝行の中で全て果たすことができる】と判りました。

今回書かせて頂いたそれぞれの出来事が一つの点とするならば、その点が今線となり、立体的な面となり立ち上がって行く予感がひしひしとしております。いよいよこれからが本番です。父と母への恩返しから【歌と調味料】で幸せをどんどん創って参ります。

末筆になりますが、奄美大島と徳之島は【敬天愛人】を唱えた西郷隆盛さんが流された島で大変縁が深く、今回の【敬天愛人と仲間たちII】に執筆依頼が奄美大島出身の屋宮直達氏からあったのも不思議なご縁だと感動し、誠心より感謝しております。

